

効果があらわれ、二輪車から自動車に進出する目処もたち、工場もつくった。しかし、そんな多忙な時期も、坂田さんはハープを習うことをやめなかった。

パリでハープにのめり込む

とはいえ、本格的にハープ収集に火がついたのは、99年にパリに駐在してからだ。パリはヨーロッパ文化の中心地。楽器に関する豊富な資料や古文書を収蔵した図書館、博物館がたくさんある。週末にはそうした場所で文献を読みあさり、ハープという楽器の奥深さを知った。世界で最も古いハープはイラクのウルで見えられた5千年前のもの。その前の時代にもすでに洞窟画に描かれている。ピアノやフルート、トランペットなどよりもずっと古い楽器なのだ。

そして、ケルトハープやアイリッシュハープ、パラグアイやペルーなどの中南米、アフリカ、南北朝鮮、中国、台湾、インドネシア、タイ、ベトナム、インドなどと世界中に存在することを知った。すると、ますます面白くなった。

坂田さんは、フランスのブルターニュで毎年7月に開催される「ケルトハープ国際音楽祭」に通い詰めるようになった。そこには、

フランス人とかイギリス人で、ハープを趣味にしている人や趣味でハープをつくっている人がたくさん集まる。坂田さんの収集品には、こうしてヨーロッパで知り合った人たちから集めた資料や譲ってもらった楽器が多い。ついに、集めたハープは30台になった。

2003年、坂田さんはホンダヨーロッパパサウス社長を最後に60歳で定年退職した。さて、このハープをどうしようか。坂田さんは、カナダ駐在後、自然に親しみ、大好きなスキーができる拠点にしたいと斑尾高原に土地を持っていた。そこにたくさんの人にハープを見てもらえる博物館をつくらう。2年ほどの準備を重ね、05年6月、「紫音ハープミュージアム」がオープンした。世界にも類をみないハープ博物館である。

この紫音という名称には、濃い紫色が日本では最も官位が高いこと、優雅な色がハープと合っている



演奏する坂田一彦さん

ること、スイスにSIONという町があることなどいろいろな意味がある。ただ、一番強いのは、14年前に亡くなった奥さんの華道の師範名「紫水」への思いだ。

博物館の特徴は、ハープの変遷や国ごとの形状の違いがよく分かること。「ハープは転がすような連続音が出ますが、弦は調整したら、その音以外は出ないので独奏楽器にはなれませんでした。独奏楽器になるためには、音域を広げること。つまり、弦の数を増やすしかない。このミュージアムではその技術革新が見られるようになっていきます」。現在、展示してあるのは35台。今も少しずつコレクションを増やしている。また、ハープに関する古書や絵画など、他にも見どころは多い。

毎年異なるハープで コンサートを開催

ここにある世界のハープを使って、生の演奏会を聴いてもらいたいと始めたのがコンサート。毎年、違ったハープを演奏し、今年で8回目となる。今では、泊まりがけでたくさんの方の友人・知人、愛好家が集まる恒例のイベントに育った。開催日は6月の土曜日に決めている。斑尾高原が新緑でもっとも美



毎年6月に開催するハープコンサートには常連さんも多い

しく輝く季節であり、奥さんの命日でもあるからだ。今年も、ベネズエラのアルパを演奏しようと決めている、演奏者もほぼ確定している。

日本にはハープに触ったことのない人が多い。どういう楽器か分からないのでは話にならない。そこで、自ら提案して、2011年7月に飯山の泉台小学校でハープ教室を開催した。演奏家に来てもらうって生の演奏を披露し、触ったことがない子には触ってもらった。子供たちはとても喜んでくれた。また、斑尾高原にもう一つある博物館・絵本美術館と共同で、10